

## 【研究ノート】

### 「楊洲周延＝橋本直義」に関する研究状況と今後の展望

荒川 将

#### はじめに

榊原家高田藩士の橋本直義は、幕末の長州戦争・戊辰戦争という2つの大きな戦争を経験し、明治時代には浮世絵師・楊洲周延として一世を風靡した人物である。筆者は、楊洲周延没後100年の平成24年(2012)に当館(当時は上越市立総合博物館)で開催した展覧会「楊洲周延＝橋本直義－高田藩士が歩んだ浮世絵師の道－」を担当して以来、①明治を代表する浮世絵師・楊洲周延が高田藩士・橋本直義その人であることを広く紹介したい、②武士から浮世絵師へと華麗に転身した橋本直義の人物や素顔に迫りたい、ということを経験的な関心としながら、高田藩士としての側面を重視して「楊洲周延＝橋本直義」研究に関わってきた。本稿では、令和8年度に当館で楊洲周延に関する特別展を開催予定であることや令和10年(2028)に周延生誕190年の節目を迎えることから、これまでの楊洲周延に関する研究状況を概観したうえで、楊洲周延こと橋本直義の履歴や明治期における東京の旧高田藩士懇親会との関わりなど、新たな史料を活用した調査研究と今後の展望について紹介したい。

#### 1 楊洲周延に関する研究状況について

浮世絵師・楊洲周延に関する研究は、古くから美術史学における蓄積があるが、研究史上で1つ目の画期となったのは、周延の出自として長らく通説となっていた「御家人説」を歴史資料などから実証的に覆した鈴木浩平氏の研究であった<sup>1</sup>。鈴木氏は、楊洲周延の伝記研究として、浮世絵関係の基本文献(『浮世絵師伝』・『浮世絵事典』・『原色浮世絵大百科事典』)の内容を整理し、①越後生まれ(越後の人)であること、②幕府の御家人であったこと、が共通する情報であり、この2点が多くの文献で引用され、「御家人説」が美術史界で流布されてきた経緯を明らかにした。そのうえで、『上越市史』(通史編4近世二)の成果や自身による高田藩関係史料及び橋本家への調査成果をふまえて、楊洲周延が高田藩士・橋本直義であること、戊辰戦争においては神木隊士として旧幕府軍とともに箱館五稜郭まで戦い抜いた人物であることを美術史界で実証的に紹介し、「抹消すべき御家人説」と明快に指摘した。

いっぽうで、榊原家高田藩の地元である上越市では、昭和53年(1978)に企画展「高田が生んだ明治文明開化の浮世絵師 楊洲周延」を当館(総合博物館)で開催し、渡辺慶一氏による責任執筆で同名の冊子も発行された<sup>2</sup>。その冊子は、周延についての伝記・画業・年譜・子孫などが詳細にまとめられ、鈴木氏が「文献中、最も周延の伝記について詳しく記された文献」とするものの、「今日からみて誤謬があり、内容について典拠不明の事柄も多いため、引用するには十分に吟味して事実確認する必要がある」と指摘するなど、評価と課題

<sup>1</sup> 鈴木浩平「楊洲周延と神木隊について－手記『夢もの語』に記された箱館戦争での記録」(『浮世絵芸術』第157号、2009年1月)

<sup>2</sup> 『高田が生んだ明治文明開化の浮世絵師 楊洲周延』(上越市立総合博物館、1978年)

が混在したものであった。それでも、この楊洲周延に関する最初の展覧会をきっかけに、橋本直義のご遺族(孫)より周延の肉筆画作品が当館へ寄贈されるなど、当館の楊洲周延コレクションの形成に多くの成果を残している。その後、上越市史編さん事業の展開によって、橋本直義や父橋本直恕の名前を確認できる「江戸役録帳」などの高田藩士の分限帳が集成された史料集や、橋本直義が浮世絵師・楊洲周延であることを改めて指摘した『上越市史』(通史編)が発表され、それらの成果は前述の鈴木氏の研究へとつながっていく<sup>3</sup>。

こうした楊洲周延に関する研究史については、すでに真水康樹氏や村瀬可奈氏による丁寧で詳細な整理がある<sup>4</sup>。その成果によれば、周延研究の2つ目の画期となるのが、周延没後100年の節目となる平成24年(2012)であった<sup>5</sup>。この年は、当館での「楊洲周延＝橋本直義」展だけでなく、平木浮世絵美術館の「没後百年 楊洲周延 明治美人風俗」、福生市郷土資料室の「明治時代の錦絵－周延の描いた江戸－」など、各地で周延没後100年を記念する展覧会が開催され、展覧会の成果をまとめた図録も刊行された<sup>6</sup>。

当館における没後100年展は、「高田藩士としての橋本直義」という立ち位置を明確にしたうえで、「楊洲周延＝橋本直義」が歩んだ生涯について、可能な限り歴史資料に基づきながら、肉筆画を含む多彩な作品とともに紹介することを趣意として、山口県立萩美術館・浦上記念館の企画協力を得ながら開催したものであった<sup>7</sup>。展覧会の図録には、鈴木浩平氏から「高田藩士から美人画の浮世絵師へ－激動の幕末・明治を生き抜いた橋本直義の軌跡－」をご寄稿いただくなど、全面的にバックアップいただいた。なお、この論文は「今日の時点で秀逸な考証にもとづいた最も確実な周延評伝の基本文書である」と、高く評価されている<sup>8</sup>。こうした周延没後100年を1つの境として、楊洲周延の出自としての「御家人説」は払しょくされていき、現在では周延が高田藩士・橋本直義であることは定着したと思われる。

<sup>3</sup> 『史料集・高田の家臣団』(上越市史叢書5、上越市、2000年)、『上越市史』(通史編4近世二、上越市、2004年)。

<sup>4</sup> 真水康樹「楊洲周延の全体像をもとめて(上):統計的分析補論－明治浮世絵の社会科学的考察試論－」(『法制理論』54巻3・4号(通巻174号)[新潟大学]、2022年3月)、村瀬可奈「明治の浮世絵にみる「江戸」の絵画化－楊洲周延を中心に－」(『町田市立国際版画美術館紀要』第26号、2023年3月)

<sup>5</sup> この間の成果として、楊洲周延の代表作「千代田の大奥」を分析した研究(アン・ウォルソール「楊洲周延と千代田城の女中たち－九世紀末のノスタルジア－」(『季刊日本思想史』第77号、2010年)のほか、周延生誕170年の平成21年(2009年)に国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館での特別展「帰ってきた浮世絵 周延 CHIKANOBU－米国スクリップ大学コレクションより－」や太田記念美術館の企画展「生誕170年 楊洲周延」が開催された。

<sup>6</sup> 『楊洲周延＝橋本直義－高田藩士が歩んだ浮世絵師の道－』(上越市立総合博物館、2012年)、『没後百年 楊洲周延 明治美人風俗』(平木浮世絵美術館、2012年)。前掲註4真水論文では「研究レベルを画期的にあげるのは、没後100周年にあたる2012年の2つの展覧会と、その2つの図録である」と評価されている(44頁)。

<sup>7</sup> 出展作品については、当館が所蔵する肉筆画作品以外の浮世絵作品の多くは山口県立萩美術館・浦上記念館所蔵品で構成したものであった。

<sup>8</sup> 前掲註2真水論文44頁

その後、周延研究は「令和（2020年代）」に入ってから、真水康樹氏や村瀬可奈氏による成果が発表され、3つ目の画期ともいえる新たな展開を見せている。真水氏は、2,000点を超える周延作品コレクション（Kazuko Collection）を分析対象として、楊洲周延の画業についての全体像把握をめざした研究を行い、周延の作品傾向が明治22年（1889）を境に大きく変貌することを指摘する<sup>9</sup>。それ以降も真水氏は、周延作品の分類をはじめ、「揃物」・「版元」・「官員図」などの分析を重ね、周延の全体像にとどまらない明治浮世絵を考究する研究へと進展させている<sup>10</sup>。

村瀬氏は、楊洲周延を主たる検討対象として、明治浮世絵にみる「江戸」の絵画化を追究するなかで、「周延の藩士時代の経歴が江戸主題を描く内的動機となった可能性」や「高田藩士時代の直義と美人画を得意とした絵師周延との人物像の差」を指摘したほか、周延と同時代を生きた山中古洞による「美人錦絵の柔軟性に似合はぬ武士気質の怖い顔の親爺さんは周延だった」という描写を紹介するなど、周延の人物像へ積極的にアプローチした<sup>11</sup>。こうした村瀬氏による研究成果は、町田市立国際版画美術館で令和5年度に開催された企画展「楊洲周延－明治を描き尽くした浮世絵師－」に十二分に反映され、同展覧会図録は現在の「楊洲周延＝橋本直義」研究の成果を網羅した1つの到達点と評価できる<sup>12</sup>。

近年では、千代田区立日比谷図書文化館で開催された令和7年度企画展「千代田の大奥－時代へのまなざし」が、歴史学と美術史学の成果をふまえながら、楊洲周延の代表作「千代田の大奥」を素材に、明治の人びとの「江戸」へのまなざしを丹念に掘り下げた。同展覧会図録は江戸城が置かれた千代田区ならではの成果が盛り込まれた内容であり、今後の楊洲周延研究にとって、歴史学と美術史学の双方の成果を融合させていくことの重要性とその意義を改めて示している<sup>13</sup>。歴史学においては、「高田藩士・橋本直義」の全容解明という大きな研究課題について、関係史料の分析を重ねながら1つ1つ実証的にピースを集めていくことが重要である。

## 2 「高田藩士・橋本直義」に関する調査研究と今後の展望

ここでは、「高田藩士・橋本直義」に関する未だ解明されていない項目、特に①橋本直義の出生地、②戊辰戦争後の再上京の時期、③東京の旧高田藩士懇親会との関わりについて、近年の調査研究での成果とともに今後の展望を記したい。

<sup>9</sup> 真水康樹「楊洲周延の全体像をめぐって－Kazuko Collectionによる統計的分析－」（『浮世絵芸術』第183号、2022年1月）

<sup>10</sup> 前掲註4 真水論文のほか、主なものとして、真水康樹「楊洲周延の全体像をもとめて（下）：統計的分析補論－明治浮世絵の社会科学的考察試論－」（『法制理論』55巻1号（通巻175号）[新潟大学]、2022年6月）、同「「揃物」の視点による楊洲周延全体像の考究－明治浮世絵の社会科学的考察試論Ⅱ」（『法制理論』56巻1号（通巻179号）[新潟大学]、2023年6月）など。

<sup>11</sup> 前掲註2 村瀬論文。

<sup>12</sup> 『楊洲周延－明治を描き尽くした浮世絵師－』（町田市立国際版画美術館、2023年）

<sup>13</sup> 『千代田の大奥－時代へのまなざし－』（千代田区立日比谷図書文化館、2025年）

## (1) 橋本直義の出生地について

橋本直義は、天保9年(1838)8月8日に高田藩士・橋本直恕の嫡男として生まれる。直義の出生地については、これまでの先行研究においては一次資料からの実証的な裏付けが出来ず、どこで生まれたのか不明とされている。先述した鈴木氏の研究によれば、浮世絵関連の文献では「越後生まれ」・「越後の人」と記されることが多いものの、直義の生前に刊行された『明治画家略伝』では「東京ニ生ル」と紹介されているなど、出生地が高田なのか、それとも江戸なのか、長らく定まっていない<sup>14</sup>。当館でも、これまでは、高田藩の記録(「分限帳」)を根拠として、直義の父直恕が天保15年(1844)には江戸中屋敷に「徒並」(5石6斗2人扶持)として勤めていることから、少なくとも幼少期(数えて7歳)には江戸で居住していた人物と紹介してきた。

今回、改めて江戸藩邸に関する動向を記した高田藩の記録「江戸日記」を再調査し、橋本直義が出生した天保9年の記事を確認したところ、8月12日付で「橋本弥八郎儀産穢御免」とあることが判明した<sup>15</sup>。この記事によれば、「橋本直恕(弥八郎)は子の出生があり、江戸藩邸出仕を控えた」と解釈できる。直義は8月8日に出生していることから、件の生まれた子は直義のことと考えられる。つまり、この記事は、直義が「江戸」で誕生したことを裏付ける重要な史料であると思われる。いっぽうで、下級藩士である直恕が妻とともに江戸で生活していたのかどうか、そもそも江戸藩邸勤番の藩士らは妻子を伴って居住する空間があったのかどうか、高田藩における藩制や仕組みに関する疑問が生じてくる。数少ない事例としては、「鮎井雑記」の筆者として知られる竹尾住武は、文化4年(1807)に榊原家9代政永の勤気を受けて、江戸から高田へ引き上げる際に、自身の妻・娘・母の関所通行手形の発行を認められていることから、江戸詰めの藩士が妻子らを帯同して江戸で生活していたことが確認できる<sup>16</sup>。ただ、この事例が、高田藩一般に当てはまるかどうか、今後の高田藩に関する研究の進展によって、江戸藩邸勤番藩士の生活実態を含めたさらなる解明が必要である。

ここでは、これまで一次資料からの裏付けができなかった橋本直義の出生地について、「江戸日記」の記事を根拠として、高い確度として「江戸」を出生地として比定できることを指摘したい。

## (2) 戊辰戦争後の再上京の時期について

橋本直義は、慶応4年(1868)の戊辰戦争で江戸藩邸の高田藩士らが結成した神木隊に参加し、明治2年5月の箱館五稜郭の戦いまで、旧幕府軍と行動をともにする。戊辰戦争後、

<sup>14</sup> 前掲註1 鈴木論文、前掲註2 村瀬論文。渡辺祥霞編『明治画家略伝』(美術新報鴻盟社、1883年)

<sup>15</sup> 「天保九年 江戸日記」(当館所蔵「榊原家文書」320)

<sup>16</sup> 「鮎井雑記Ⅱ」(上越市公文書センター所蔵)。「鮎井雑記」は、江戸藩邸の諸行事や役職任免、江戸や道中での見聞、国元や諸国の情報を書き留めた「雑記」である(『上越市史資料目録Vol.28 諸家文書目録Ⅴ』)。竹尾住武については、花岡公貴「榊原家「御系譜」の成立と編者竹尾住武について」(『高田藩榊原家書目史料集成』第4巻榊原家御系図「解説」、株式会社ゆまに書房、2011年)参照。

江戸に戻った直義ら神木隊士は新政府から禁固 50 日の沙汰を受け、明治 2 年 7 月以降高田藩に引き渡され、高田にて謹慎した。直義が、高田での謹慎の時をどのように過ごしていたかは、未だ十分明らかではないものの、高田の絵師・青木崑山（崑山）と親しく交流していたことが、直義自筆の書状から知ることができる<sup>17</sup>。

青木崑山は、文化 2 年（1805）に高田近郊の稲田村大肝煎・青木六郎右衛門の子として生まれ、しばらく大肝煎役を勤めたが、嘉永元年（1848）には絵に専念し、人物画や山水画を描いた絵師であった<sup>18</sup>。直義が青木崑山に宛てた 5 月 10 日付の書状（年欠）には、高田滞在中の「御厚恩」に対するお礼が繰り返され、「何卒先生御存生中今一度御目ニ懸り度只日々なつかしく而已存居候」と、30 歳以上も年の離れた 2 人が同じ絵師の道を歩く者同士として重ねた友誼の深さを感じさせる。なお、戊辰戦争後の高田での生活の中で描かれたと思われる、2 人による合作の肉筆画「天満宮図」（年不詳、紙本着色 1 幅、縦 177.0 cm×横 53.0 cm）が残されており、両者の親しい関係性を示している<sup>19</sup>。

かつて、この 5 月 10 日付の書状については、当館で開催した没後 100 年「楊洲周延＝橋本直義」展で初めて展示し、橋本直義が戊辰戦争後にふたたび東京へ戻った時期についての重要な情報が含まれている史料として発表したことがある<sup>20</sup>。書状には、「去月廿一日東京へ着仕候」と 4 月 21 日に東京へ到着したこと、さらに「住居之義ハ上野廣小路北大門町十一番地畳建具付家求メ」と上野広小路北大門町に住居を構えたことが認められている。この住所は、明治 13 年頃まで直義が居住した場所として知られ、明治時代の初期周延作品に記される住所とも合致する。この書状は、直義が、激動の幕末を戦い抜き、再生の時を過ごすその時に書かれたものであり、明治時代を代表する浮世絵師・楊洲周延の第一歩を象徴する資料として大変重要であり、そのため書状の作成年の比定が大きな検討課題であった。当時は、『高田市史』における青木崑山に関する履歴情報（「明治四年正月十七日没ス。歳七十一。」）を根拠として、宛名の崑山が明治 4 年 1 月 17 日に逝去している時点を下限とし、直義が戊辰戦争後に高田で滞在していた時期（明治 2 年 7 月以降）、4 月 21 日に「東京」へ到着していること、などをふまえて、明治 3 年（1870）5 月 10 日付の書状と比定したのであった<sup>21</sup>。この書状を根拠に、直義が再び東京へ出た時期を明治 3 年として主張したのだが、実は近年の調査で明治 3 年説の前提となる青木崑山の逝去年が明治 4 年正月ではないことが判明した。このことによって、青木崑山宛橋本直義書状の作成年の比定とともに、直義の再上京の時期についても再検討が求められることとなったのである。

17 「青木崑山宛橋本直義書状」（上越市立高田図書館所蔵「青木家文書」）。この書状全文は前掲 6『楊洲周延＝橋本直義』に掲載。

18 青木崑山の履歴については、『高田市史』（高田市教育会、1914 年）657～658 頁及び『高田市史』（第 1 巻、高田市、1958 年）236 頁など参照。

19 楊洲周延・青木崑山筆「天満宮図」（当館所蔵）。「一春斎周延筆」と、周延初期の画号である「一春斎」が使用され、周延の描いた天満宮図に崑山が松梅図を添えた作品。

20 拙稿「橋本直義が遺した二通の手紙」（前掲註 6『楊洲周延＝橋本直義』所収）

21 前掲註 18『高田市史』658 頁。

青木崑山に関する史料を所収する青木家文書には、「祖父崑山翁香典簿」（年欠6月17日付）・「祖父崑山翁三十五日香典簿」（明治8年7月21日付）・「法名釈崑山廿三回忌釈尼妙洸世三回忌法会記」（明治30年4月17日付）・「亡祖父崑山式拾七年忌法会」（明治34年3月18日付）など、崑山の回忌関係の史料があることが確認できた<sup>22</sup>。これらの史料によれば、崑山の逝去年月日は明治8年（1875）6月17日であった<sup>23</sup>。いっぽうで、青木家文書を改めて精査すると、橋本直義が高田に滞在中と思われる時期の史料として、「庚午日曆」（明治3年4月～12月）・「辛未<sup>(ママ)</sup> 禄」（明治4年1月～明治5年2月）と題された「日誌」の存在を確認した<sup>24</sup>。これらの史料は、作成者の署名はないものの、月日・天気・その日の出来事や来訪者などが記録されたもので、青木崑山が作成した「日誌」であると思われる。この史料からは、明治3年8月頃から橋本直義がしばしば青木家を訪れていること（日誌には「橋本来」などと記載される）や、「庚午日曆」の11月4日付で「一、橋本天満宮松添書」と先述した「一春斎周延筆」の天満宮図へ松の添え書きをしたことなど注目すべき記事が確認できる<sup>25</sup>。そのなかで最も重要なのは、「辛未禄」所収の明治5年2月4日付で「橋本<sup>(ママ)</sup> 明江戸行ニ来」と、「江戸行き」を決めた橋本直義が青木崑山に挨拶に来た様子が記述されていることである。この史料のとおり、この時点で東京行きの行動を起こしているとすれば、直義は明治5年2月に高田を出発し、同年4月21日に東京へ到着した（青木崑山宛橋本直義書状）と考えられるのである。

こうした近年の調査結果（青木家文書の史料分析）からは、青木崑山の逝去年が明治8年6月17日であること、楊洲周延と青木崑山の合作「天満宮図」の作成年が明治3年11月であること、明治5年2月4日付で橋本直義が明確に「江戸行き」の意思を示していることが新たに判明した。橋本直義の再上京の時期としては、これまでの明治3年説は修正が必要となったこと、その上で新史料の記事から明治5年の再上京の可能性が高いことを主張しておきたい。しかしながら、青木崑山宛橋本直義書状の作成年代の比定としては、崑山逝去までの可能性は拭いきれず、現時点では明治5年から明治8年までの間とするのが妥当だと思われる。今後は、青木家文書のみならず、高田藩に残る神木隊関係史料の調査研究を進めていくことで、神木隊士らの高田謹慎時期における動向を一層明らかにしていくことが求められる。

### （3）旧高田藩士懇親会と橋本直義の関わりについて

明治4年（1871）の廃藩置県後、旧藩主榊原政敬は東京へ移住し、かつて中屋敷があった池之端からほど近い本郷弓町に居を構えたほか、旧高田藩士族のなかにも職を求めて上京

<sup>22</sup> 「祖父崑山翁香典簿」・「祖父崑山翁三十五日香典簿」・「法名釈崑山廿三回忌釈尼妙洸世三回忌法会記」・「亡祖父崑山式拾七年忌法会」（前掲註17「青木家文書」）

<sup>23</sup> 『中頸城郡誌』（新潟県中頸城郡教育会、1973年）では、「青木崑山」の項があり「明治八年六月十七日没。年七十一。」とある（1667頁）。

<sup>24</sup> 「庚午日曆」・「辛未<sup>(ママ)</sup> 禄」（前掲註17「青木家文書」）

<sup>25</sup> 戊辰戦争後の橋本直義と青木崑山の交流については、別稿で改めて論じたい。

するなど東京で生活する者は少なくなかった<sup>26</sup>。こうした東京在住の旧藩士族らの親睦を図るため結成されたのが、明治17年(1884)に創立された旧高田藩士懇親会(以下、懇親会)である。第1回懇親会は、明治17年5月25日に「江東中村楼」で開催され、当時すでに西南戦争を描いた戦争絵で人気浮世絵師の仲間入りをしていた橋本直義も出席している<sup>27</sup>。この時期の橋本直義は、明治15年の第1回内国絵画共進会に「山姥図」・「地獄太夫図」を出品し褒状を受けただけでなく、明治17年の第2回内国絵画共進会でも出品作が銅賞(宮内省御用品)となり、受賞を受けて「幼稚鶏合之図」が出版されるなど、絵師としての地位を確かなものにしていく時期であったことが分かる<sup>28</sup>。

この懇親会については、「旧高田藩士懇親会要覧」(以下、「要覧」と「旧高田藩士懇親会書類綴込」(以下、「書類綴込」という史料がある<sup>29</sup>。「要覧」は、懇親会の活動の概要をまとめたもので、「書類綴込」は各懇親会の開催内容や参加者などに関する書類を集成した内容になっている。これらの史料は、大正6年(1917)12月に懇親会幹事によって作成されたもので、いずれも昭和13年(1938)12月の第47回懇親会(最終回)までの記事が書き継がれている。このうち「要覧」を用いて分析した星野尚文氏は、この懇親会が「同郷会」の一種であり、会の特徴として高齢者が多く「高田藩を知っている世代」が中心であること、この会が「高田士族の組織力の高さ」を現わしていることなどを明らかにした<sup>30</sup>。いっぽうで、星野論文では旧藩主榊原政敬の出席は不明とするなど、旧藩主や旧藩主家がどのように関わっていたのかについて検討の余地を残していたが、「書類綴込」によれば第1回懇親会に旧藩主榊原政敬が臨席し旧藩士83人の参加があったこと、その後の懇親会(明治40年[1907]の第29回以降)にも継続的に旧藩主が列席していることなどが確認できる<sup>31</sup>。この懇親会については、記録が散逸し、詳細が不明となっている回が複数回(第2回～第6回、第35回～第36回)あるものの、第1回から第47回まで半世紀以上にわたり継続して開催されていたことは大変注目できる。

この懇親会は、会のあり方に関する項目(開催内容や会費など)を幾度も改正しながら、活動を継続させてきた。例えば、参加者が減少していた明治25年(1892)には会員より「会ノ組織会費其他ノ事項ニ就キ意見書」が提出され、懇親会の開催回数をこれまでの年2回から1回へと改め、60歳以上の会員への優遇策として会費無料の措置などが議論された。結果として、開催回数は年1回となり、60歳以上の会員の参加費は旧藩主家である榊原家が

<sup>26</sup> 星野尚文「東京の高田士族」(前掲『上越市史』通史編5近代)145頁。

<sup>27</sup> 旧高田藩士懇親会と橋本直義については、拙稿「榊原家高田藩士としての橋本直義」(前掲註12『楊洲周延—明治を描き尽くした浮世絵師—』)で触れたことがある。

<sup>28</sup> 「関連年譜」(前掲註12『楊洲周延—明治を描き尽くした浮世絵師—』)

<sup>29</sup> 「旧高田藩士懇親会要覧」(公益財団法人旧高田藩和親会所蔵和親会文書378)、「旧高田藩士懇親会書類綴込」(公益財団法人旧高田藩和親会所蔵和親会文書379)

<sup>30</sup> 星野尚文「明治期における旧高田藩士族の動向—士族の組織化をめぐる—」(『東海大学紀要 文学部』第103号、2015年3月)

<sup>31</sup> 最後の高田藩主・榊原政敬(旧藩主家)と旧高田藩士懇親会については、別稿で論じる予定である(拙稿「最後の高田藩主榊原政敬と旧高田藩士族」[2026年3月15日脱稿])。

全額負担することが決定している。また、昭和2年(1927)に旧藩主榊原政敬が逝去すると、会の存続への懸念が生まれたようで、昭和6年(1931)に懇親会幹事らが「本会ニ関スル問題」を議論している。そこでは、旧藩主家において新たな当主を迎えた時期に、旧藩士らの子弟が「旧藩士ノ何タルヲ解セサル」事態になることへの恐れや懇親会の存続に強い危機感が示されたほか、懇親会を存続させる方策として、参加者の世代交代を進め、次回から成年に達した子弟を同伴させ、相互の親睦を計り、会の「相続者」を育成する案も出されている(以上、「書類綴込」)。

懇親会の存続に関わる会員の世代交代について、橋本直義は好例である。直義は、第1回懇親会に参加したのち、彼の代表作である「千代田之大奥」・「時代かがみ」・「真美人」などを制作している時期(明治28年～明治30年)であっても継続して出席し、明治39年(1906)の第28回懇親会からは子の橋本直治を同伴して参加している。橋本直治は、父直義が欠席した回や大正元年(1912)の父逝去後の懇親会にも継続して参加しており、橋本家の事例は会員の世代交代が円滑に進んだ一例として大変注目できる。明治を代表する浮世絵師となった橋本直義にとって、この懇親会は榊原家高田藩士としての自らの出自を再確認する場所であり、旧高田藩のコミュニティ(「旧藩社会」とつながる大切な空間だったのである。

今後、この旧高田藩士懇親会と橋本直義の関係については、懇親会の活動の詳細情報が集成されている「書類綴込」と、懇親会の概要をまとめた「要覧」とをあわせて分析していくことで新たな研究成果が期待できる。

## むすびにかえて

本稿で概観したように、「楊洲周延＝橋本直義」研究はいくつかの画期を経ながら、現在は歴史学と美術史学の成果を融合させていくという新しい研究状況へと進展している。今後さらに、浮世絵師・楊洲周延の画業や絵師としての魅力が解明されていき、美術史学における楊洲周延の評価が改めて定まっていくことが期待できる。

いっぽう、橋本直義ゆかりの上越市においては、高田藩関係史料の分析を重ねていくことで高田藩士・橋本直義に関わる基礎的な情報を実証的に裏付けていくことが重要である。橋本直義の履歴については、直義の出生地(「江戸」か)や戊辰戦争後に再上京する時期(「明治5年」か)など、全容の解明にあと一歩という段階にあるものも多く、浮世絵師・楊洲周延としても重要な基本情報の把握のために、今後も引き続き調査研究を進めていきたい。

令和10年(2028)には橋本直義の生誕190年の節目を迎える。当館で平成24年(2012)に開催した展覧会名「楊洲周延＝橋本直義」は、浮世絵師・楊洲周延として知られる知名度の高さと周延の出自として「御家人説」が根強かった状況の克服を意識して、周延の名前を先にあげたものであったが、激動の幕末・明治を生き抜いた一人の高田藩士の生涯とともに、今後その存在が「橋本直義＝楊洲周延」として広く認知されていくことを願ってやまない。

(上越市立歴史博物館 資料係長)